Ｎｉｇｈｔｉｎｇａｌｅ －Ｎｉｇｈｔｆａｌｌ－

神代　ツバサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｉｇｈｔｉｎｇａｌｅ　―Ｎｉｇｈｔｆａｌｌ―

【Ｎコード】
Ｎ６６９１Ｃ

【作者名】
神代　ツバサ

【あらすじ】
そして夜が来た。蒼白い月。雲一つない空。明かりの消えた影絵の町。未だ夏の気配を僅かに残す秋の夜風。そんな夜風に吹かれながら、夜の繁華街を歩く一人と一匹の影。「それで、何か作戦は？」「ないわよ。いつも通り臨機応変に、てやつよ」殺人鬼が毎夜徘徊する繁華街を、何の緊張感も見せずに歩んでいく。誰もが怯え、閉じ篭る夜を往く者。光射さない闇の世界の守護者。彼女達を知る一部の者は、彼女達を尊敬と畏怖を込めてこう呼ぶ。【闇夜に死を招く小夜鳴き鳥】

Ｍｉｄｎｉｇｈｔ（前書き）

まだまだ初心者なので内容にご不満がでるかもしれませんが、よろしくお願いします。
あと、執筆は亀のように遅いはず・・・。
が、頑張ります！

Midnight

――ねえねえ、知ってる？

えっ？　なにを？

――最近ね、夜中に通り魔が出るんだってさ

やだー。物騒な話だねー

――なんでも親しげに近づいて話しかけてきて、いきなり路地裏に連れ込むんだって

で、やっぱりその後は……

――全身をどんなパズルの名人でも組み立てられないくらいにバラバラにするらしいよ

ちょっとぉ、これから食事するっていうのにそんな話しないでよ

――ごめんね

もう、気をつけてよー

――でもこの辺りで出るらしいから、ちょっと噂話程度に言っておこうかな、て

嘘でしょ？　本当に？

――本当さ。いつもこの辺りで事件が起きてるんだ。だから人影もないだろ？

ねえ、やばいんじゃない？　さっきの道に戻ろうよ

――ちなみにね、彼には通り名までついちゃったんだって。通り魔に通り名だって。笑えるね

そんな事はいいから、早く戻ろうよ

――そのあまりにも残虐な行為と、現場に残された犯行後から

え、ちょっと、な、ナニよ、それ！？

――【ジャッカル】てさ

……

……

……

……

…

ぐちゃ

その一

夜に帳が下りた繁華街
普段は煌びやかなネオンの光に包まれている筈の空間は、街灯と幾ばくかの店頭の灯火を残すばかりとなっていた
酒器に包まれたサラリーマンの姿も、思い思いの奇天烈な格好をした若者も、声を張り上げている筈の客引きの声も聞こえない
そこは既に、物寂しいだけの場所と成り果てていた
それも当然か
ここは通り魔事件の現場真っ只中なのだ
こんな夜遅くに表を出歩く勇気のある者はそうはいまい
いたとしても、勇敢と命知らずという言葉の意味を履き違えた勘違いか、巡回中の警官くらいのものだろう
そんな中を、一人の例外が歩いていた
黒い長髪とロングコートの裾を夜風になびかせる、サングラスをかけた女性
女性は危険な夜の繁華街を、何かを捜し求めるように歩いている
コツッ、コツッ、コツッ
無機質で規則的な足音が響く

「――――」

と、女性が何かに気付いたように、ふと顔を上げる
その顔には微かな緊張と、一抹の嘲りが浮かんでいる
それまで規則的であった足音を乱し、三つ先の曲がり角に向かって走る
曲がり角が近づくにつれて反響した何かの音と、それと注意されなければ気付かないような鉄錆びた匂いが漂っていた
どうやら今日もまた、事件が起こったようだ

事件の被害者は勘違いした無謀な馬鹿か、それとも今さら自分だけは襲われないとタカを括っていた阿呆か
どちらにせよ、女性にとっては関係ないことである

走ってきた勢いを殺さず路地裏へと飛び込む
そこは既に濃厚な血と死の臭いが充満する異界へと変貌していた
哀れな被害者だったモノは、自らの血溜りに今は散らばっている
整然の名残を見せるのは、今やその異界の中央に立つひょろ長い男の手に握られる頭部だけ
ボサボサの長髪、幽鬼のような印象を受ける細長い体躯、そして、人ならざる真紅の瞳
男は急に自分の世界に紛れ込んだ女性をどこか呆然と見詰めていたが、彼女が一歩を踏み出したのを見て、警戒するように身構えた
それを見て、女性は嬉しそうに嗤う

「へえ。もう意識が確立しているんだ」

笑う。哂う。嘲笑う
なにがそんなに可笑しいのかと尋ねたくなるほど愉れしそうに女性は嗤う
男はそんな女性の異様な雰囲気に気圧されたように後ずさる

「あら、つれないわね。折角こうやって逢いに来てあげたのよ」

ゆっくり、ゆっくりと一歩づつ男に歩み寄りながら、女性はサングラスを外す

「さあ、殺しあいましょう」

思わず男は、サングラスの下から現れた女性の瞳に魅入った
金と銀
女性が身に纏うモノの中で、唯一色彩を持ったモノ
金銀妖眼――――俗にヘテロクロミアと称される色違いの瞳（オッドアイ）
カシャッ、とサングラスが地面に落ちる音で、ようやく男は我に返った
【ジャッカル】と呼ばれる男は膝を軽く曲げると、手に持っていた哀れな被害者の首を恐るべき速度で投げつけた
唸りさえあげて飛んでくる頭部を半身になることで避けた女性は、口角を吊り上げると唐突に消えた
本当に唐突に姿を消した女性の姿をジャッカルは慌てて探した

「遅い」

背後からの声
反射的に振り向きざまに肘を繰り出すが、返ってきたのは空を切る手ごたえ
次いで、ジャッカルは急激な横方向の衝撃に吹き飛ばされる
壁に激突すると同時、重く響く音が鳴る
音さえも置き去りにした一撃にジャッカルは完全に崩れた壁に埋もれた
女性は自身が成した結果などに目もくれず、先ほどまでジャッカルが立っていた場所へと近づく

「あの瞳を見る限り、何らかの魔術的処置が施されているのは間違いないけど……魔術師ではなさそうね」

もはや肉片、としか言いようのないモノが散らばっている場所を見

て、女性は残念に呟く
つと、その視線が流れる
行き着いた先にはようやく瓦礫から這い出てきたのか、傷だらけのジャッカルが身を起こしていた
その眼は殺気にギラギラと光っている

「ガァッ！！」

獣のような叫びと共にジャッカルは今度は自分が弾丸のように飛び出した
そのまま身構えた女性の横をすり抜けるように通り過ぎ――――

「――――っやる！」

路地の両脇の壁を蜘蛛のように跳び回り加速していく
その動きは女性が感嘆するほど美しく、滑らかなものだった
無論、この路地裏は障害物も多くそこかしこに血も付着しているため、足場は最悪に近い
が、それでもジャッカルの動きは一瞬の停滞もなく、恐るべき人外の速度で跳ね回っている
狭い路地の空間を黒い影が縦横無尽に飛び交う

「そこっ！」

しかし、女性もまた普通ではなかった
無造作とも言える一歩を踏み出し、同時に拳を繰り出す
瞬間、信じ難い音を立ててジャッカルが吹き飛んだ
その勢いは先ほどの比ではなく、地面に落ちてなお速度は衰えず転がり跳ねながら吹き飛んでいく
追撃に、と女性が走り出そうと身構えると、ジャッカルは吹き飛ぶ

勢いを利用して跳ね起き、ナイフを投擲する
風切音を立てて飛翔してくるナイフを軽く首を捻る動作で回避し、
柄の部分を握る
そしてそのまま投げ返そうとしたところで、両者とはまったく違う
別の気配が路地に入り込んできた

「そ、そこでなにを――――」

その気配の主は、それ以上言葉を続けることはできなかった
瞬時に気配に反応したジャッカルが疾走し、その勢いのまますれ違
いざまにナイフを一閃
血飛沫が舞う中、ジャッカルは夜の闇へと消えていった
女性もそれを見届けると、何事もなかったように路地から出て歩き
出す

「逃がしたか。まあ、久しぶりに狩りもいいかもね」

そんな一言を呟きながら

その二

「君がしくじるとは、珍しい事もあるものだね」

自宅のドアを開けると同時、正面の階段の影から声が響いた

よく見ると、その影には翡翠色の二つの瞳が浮かんでいる

「……」

女性は無言でその影の前を通り過ぎ、不必要なほど大きい扉を開けて居間へと入っていく

「せっかくの獲物を取り逃がすなんて、『黒金　氷雨』ともあろう者が――――」

「黙りなさい」

付き従うように追ってきた声を遮り、女性はソファに沈み込んだ

「君がこの街に来てから処理したモノの数は、凡そ百以上。そのうち逃走を許したケースは――――」

思わせぶりに間を空ける

「ゼロ、だ」

ヒュン、と何かが空を切る音

しかし、いつまで経ってもそれが何かにぶつかった音はしない

「いい加減にして。いかにアンタでも次は本気で殺るわよ」

それが無意味な脅しである事は、彼女自身がよく知っていた
トットット、と軽い足音が響き、居間に小さな影が入り込んできた

「いけないなぁ。無意味な脅しは虚しいだけだよ？」
「黙りなさい。アンタこそ、こんな所で油を売ってないで、アレの追跡ぐらいしなさい」
「既に手は打ってあるよ」
「……相変わらず優秀ね、久遠」
「お褒め頂き恐悦至極、と答えておこうかな」

締め切ったカーテンの隙間、僅かに差し込む月光が影を捉えた
それは、猫だった
まるで闇に溶け込むような漆黒の毛皮を纏い、翡翠の双眸を煌かす
黒い猫
猫は彼女の足元に座り込み、従者が主人の言葉を待つように見上げる
女性は猫を見るも、無言
一人と一匹は静かに見詰め合う
女性の名を、『黒金　氷雨』
猫の名を、『久遠』
彼女らこそ日の光届かぬ影の世界を守る者

＊＊＊

六夜市
人口１０万人を有するそれなりに大きな都市である
とりわけ人口の多さしか特徴のないこの市は、首都圏に近いとはいえ特に重要視されるような場所ではない
そんな市の一角、白夜町には誰もが知る七不思議が存在している
曰く、白夜町は夜な夜な魑魅魍魎の跋扈する場所

曰く、白夜町は夜な夜な巫女服姿の少女が徘徊している
曰く、白夜町は夜な夜な人が消えていく
曰く、曰く、曰く、……
そんな七不思議の一つに、実際にその存在が確証されたモノが二つある
一つは、夜な夜な巫女服姿の少女が徘徊する、というものと
そしてもう一つは、白夜町には黒い魔女が住んでいる、というものである

＊＊＊

その七不思議の一つに数えられる、黒い魔女こと『黒金　氷雨』
彼女は七不思議の事は当然知っていたが、それに対して何らかの言を発した事はない
ただ己の呼ばれ方に無頓着なのか、はたまた外界からの刺激に無関心なのか
ハッキリしている事は、目下彼女が今最も気にしているのは昨夜の犯人の事だけである

「それで、場所はわかったの？」

基本的に怠惰な彼女は、昨夜そのまま寝てしまったソファーに沈み込んだままだ
クッションを抱き枕に寝転んでいる姿は、とても今年で１９歳になった女性のものとは思えない
誰が用意したのか、近くにあったテーブルの上に置かれていた朝食のパンを食べながら使い魔の久遠に尋ねる
もはや己の主人の怠惰な性格には諦めが付いているのか、久遠は義務的に答える

「いや。どうも彼ってば寝床を転々と変えているらしくてね、はっきりとした寝床はわからなかったよ」

声だけで判断するなら久遠は二十代前半の歳若い男性の声をしているもっとも、魔術師にとって使い魔の声など新しく『設定』し直せば、幾らでも変えることはできるのだが
端的に言えば、マスターである魔術師が望めば例え雄であろうとも雌の声に変えることも出来るのだ
ご都合主義ここに極まれり、だ

「で、続きは？　まさかアンタが、そのままわかりませんでした、て素直に帰って来る訳ないでしょ？」
「流石、我がマスターは己の使い魔の事をよく知っているね」
「当然よ」

だって私の使い魔だし、と氷雨は続け

「まあ、そのまま帰って来てたら折檻だけどね」

と空恐ろしい事を言い放った
その言葉を聞いて、久遠はがっくりと首を落とした

「就職先、間違えたかなー」
「御託はいいわ。報告を続けなさい」
「はーい。ま、結果から言うと彼は自分の主である魔術師の工房に逃げ込んだみたいだよ」
「魔術師の？　どうしてまた？」
「忘れた？　彼もまた魔術の哀れな犠牲者さ。結局のところ、一度でも魔に染まれば安息の地はないのさ」
「だからこそ、現世の地獄であり楽園へ？　馬鹿馬鹿しいわ」

断言し、氷雨は先ほどの会話に違和感を感じた
工房？　魔術師？
ちょっと待て、確かこの町には自分しか魔術師はいないはず
『管轄者』も、そう言っていたはずだ

「私以外の魔術師ですって？　一体何処に隠れていたの？」
「ああ、そのこと」

口を突いた疑問に、久遠は簡潔に答えた

「別にこの町にある、て言ってないけど」
「じゃあどこにあるのよ？　隣町？　それとも市外かしら？」
「うん。白夜町と深夜町のちょうど境目、ギリギリ深夜町寄りにある廃屋。そこに工房があったのさ」

完全に君の把握不足だね、と言う久遠を氷雨は蹴り飛ばす
やらなければならない事ができた、と氷雨は思った
最善までの惰性っぷりが嘘のようにきびきびとした動作で二階の自室へと戻り、素早く衣装を脱ぎ捨てて新しい服に袖を通す
クローゼットを空けた瞬間、不快な物が視界に入ったが黙殺
薄めのセーターにロングスカート。無論、両方とも色は黒である
着替えが終わると床に放置していた大き目のアタッシュケースに色々とぶち込み、部屋を飛び出る

「うぅ……。ちょっとは手加減してよ、マスター」

ずりずりと這う様に居間を出てきた黒猫の首を引っ掴むと、玄関の戸を蹴破るように開け放つ

その際、ふぎゃ、という声が聞こえたが無視して施錠を行い町に向かって走り出す

「いったいどこに行こうってのさー」

「決まってんでしょ」

久遠の抗議の声を一言で切って捨て、氷雨は走り続ける

「買い物よ」

その三

そして夜が来た
蒼い月
雲一つない空
明かりの消えた影絵の町
未だ夏の気配を僅かに残す秋の夜風
そんな夜風に吹かれながら、夜の繁華街を歩く一人と一匹の影

「それで、何か作戦は？」
「ないわよ。いつも通り臨機応変に、てやつよ」

殺人鬼が毎夜闊歩する繁華街を、何の緊張感も見せずに歩んでいく
誰もが怯え、閉じ篭る夜を往く者
光射さない闇の世界の守護者
彼女達を知る一部の者は、彼女達を尊敬と畏怖を込めてこう呼ぶ

【闇夜に死を招く小夜鳴き鳥】――――ナイチンゲール

＊＊＊

獲物がいない
彼――――ジャッカルと呼ばれる殺人鬼は、一抹の焦燥と飢餓を感じながら思考した
昨日まではまだ頭の悪そうな連中や警官がいたのに、今日に限って誰もいない
繁華街はまるでそこだけ切り離されたように死都と化していた
光さえ、そこには見出せない
唯一の光源は月明かりのみ

頭上で観測者のごとく君臨する、蒼白い星
クソッ、と毒づくがそれで状況が改善されるわけでもない
脳髄を埋め尽くす殺人の欲求
それは、人を外れたが故に架せられた義務
誰でも、何でもいいから殺せ、と
いっそのこと別の場所を変えるか？
脳裏に浮かんだ考えを即座に却下する
忌々しい事にこの躯は契約によって縛られている
あのムカつく【魔術師】にこの場所でのみしか殺人を許されていない
クソッ、と再び毒づく
唾を破棄捨てるために俯いていた顔を上げる
と、前方から誰かがやって来るのが見えた
男の眼が爛と輝いた
獲物が来た
普段なら獲物を選ぶところだが、今夜は他に当てがないので我慢する事にした
それに昨夜は妙な女に邪魔された所為で途中で終わってしまったので欲求不満気味だ
誰でもいいから殺し、この焼けるような欲求を満たしたい
だから、殺す
そう男が思考した直後だった

「あら、待たせたかしら？」

ひどく聞き覚えのある声が響いた
黒い長髪とロングコート
金と銀の不揃いな瞳
そして黒、黒、黒、黒、黒
真っ黒い衣装
瞳と肌の色以外の全てを黒に統一した姿

昨夜と寸分違わぬ姿で、そこい女は立っている

殺せ

抑えていた筈の衝動が沸き起こる

殺せ

興奮のためか息が荒く、早くなっていく

殺せ

体全体がどうにかなりそうなほど熱い

殺せ

全神経が目の前の女の存在を殺し尽くせと叫んでいる

ニタリ、と男は哂った

そうだ、この女を殺せ

この女の所為で昨夜は行為を中断され、あの忌々しい魔術師の所に

戻らなければならなくなった

それに、こいつを殺せば自由が戻ってくる

人を自由に殺せる日々が！

男は、歓喜と狂喜に支配され、壊れた思考の果てに叫びを上げた

狂ったように、否、まさしく狂った叫びを上げるなれの果てを、氷

雨は冷めた瞳で見詰めた

所詮は己の快楽のために人を捨てた外道

こんなモノに哀れんでやる必要もない

必要があるのは必殺の殺意と死闘への期待
これだけで充分だ
次第に自分の顔がニヤけてくるのを氷雨は自覚はしていたが止められないでいた
久遠にはいつも叱咤されるが、この殺し合いの始まる刹那の時間に満ちる形容し難い感情のうねりは到底我慢できるようなものではない
麻薬だな、と氷雨の未だ冷静な部分はそう嘲る
殺し合いという最高の美酒に酔い浸る自分
精神を病んだ快楽追求者

――――愉しいねぇ

声に出さずに呟き、どうやらようやく殺し合いの準備が出来たらしい相手に応えて身構える
月光を反射するナイフを両手に、ジャッカルが殺意と怒気と狂喜を込めた眼光を叩き付けて来る
挑発するように指を立て、誘うように招く

「来なさい。殺してあげる」

闇に煌く閃光は三つ
それぞれ首、腹、足を狙って放たれた斬戟をバックステップで避け、カウンターで蹴りを放つ
ヴォンッ！　と空気を穿つ音を立ててこちらの蹴りは空を切り、身を屈める事で回避したジャッカルが体ごと飛びつくように刺突を繰り出す
蹴りの勢いで体軸を回転させ、後回し蹴りを以ってその刃を迎え撃つ
鈍い音が周囲に響き、ジャッカルの手からナイフが弾き飛ばされる
そのまま後に跳び退って忌々しげに舌打ちをした様子を見るに、どうやら手首が折れたらしい

クスッ、と氷雨が嘲るように哂うと、面白いほどにその顔が憤怒に歪んだ
それが霞のように薄れ、爆弾か何かと勘違いしそうな踏み込みの音が空気を揺るがす
昨日の氷雨にも匹敵するほどの移動速度だ
しかし氷雨は余裕の表情でやや右後方に現れ、無事な方の手で斬りかかって来たジャッカルの攻撃をあっさりと回避する

「甘いわよ！」

そして腕が伸びきった瞬間、氷雨はジャッカルの腕を極めて投げ飛ばす
が、ジャッカルは驚異的な体反射で投げを切り返し、そのまま後に距離を取りながらナイフを投擲する
手首と肘の動きだけで投擲されたナイフが氷雨の顔面を射抜かんと迫るが、一歩横に動いてやり過ごす
逆に今度は氷雨がポケットに入れていた物を取り出し、親指一本の力だけで撃ち出す
硬い物がアスファルトにぶつかってめり込む音が響く
ジャッカルは呆然とした表情で自らの頬を掠めた物体の軌跡を辿る様に見る
それは僅か直径一センチ程度のガラス球であった
だが、ただのガラス球がいかな驚異的な速度で撃ち出されたからと言ってアスファルトにめり込むことはない
魔術的な加護によって鉄以上の硬度を持った無色透明なガラス球だ
先日、氷雨が買い物と称して玩具売り場で購入したのがこれ
詰まる所、ビー玉である
手軽で多数携帯できて、その上コストも低価格で暗器として申し分のない得物だ

「この間の闘いだけで、私が遠距離に対する攻撃手段を持たないと勘違いしたようね」

言葉尻に合わせて連続で六発を指弾として撃ち出す
ジャッカルは本能で危機を察したのか、その場から全力で退避する事で二発を掠らせる程度に抑えた
攻撃が『点』であるという事に加えて無色透明なビー玉は、暗闇で正確に視認してかわせるほど優しい物ではない
さらに、それを放つのが人類という種族のカテゴリーから突出した存在である氷雨なのだ
それがどれほどの脅威なのかは語るまでもない
次々と放たれる指弾に、ジャッカルは徐々に劣勢へと追いやられる
必死の形相で回避を続けるジャッカルを嘲笑う様に、氷雨の放つ指弾は勢いを増している
そして遂に、凶悪無比な弾丸がジャッカルの足を打ち砕いた
悲痛の叫びと怨嗟の声が響く中、無数の弾丸が肉を穿つ音が夜に響いた
血塗れのボロ雑巾と化したジャッカルが、路地に打ち捨てられたように倒れる

「さて、死ぬ前に質問をするわよ」

完全に目標を無効化したと判断した氷雨は無造作にジャッカルに近づくと、その腹を蹴って仰向けにする
ヒュー、ヒュー、と頼りない呼吸を繰り返すジャッカルの眼は既に死人のそれだ
それでも一片の慈悲を与えず、氷雨は己の使命を全うする

「あなたを造ったのは誰？」

瀕死のジャッカルの体が激しく痙攣した
最善まで死人の様だった眼は、いまや嚇怒に彩られている

「答えなさい」

氷雨の凍えるような言及さえ通じていないのか、ジャッカルは痙攣し続け――――

「――――」

そのまま息を引き取った
殺人鬼の生命が失われた事を確認すると、氷雨は重い溜息を吐いた

「結局、自分で確かめるしかなのね」
「そうだね。でも、それはいつも通りだと思うよ」

いつからそこにいたのか、路地の傍らに置かれていたポリバケツの上に、久遠がちょこんと座っていた
呑気に後ろ足で首下を掻いている姿を、氷雨は殺意を込めた眼光で射抜く
ビクッ、と久遠の体が跳ねる

「アンタ、そこで何やってんの？」
「いや、ほら。下手に戦闘に支障が出ないようにちゃんと避難していたんだよ」
「私がアンタに下した命令は覚えている？」
「勿論。敵である魔術師がこの闘いに介入してくるかどうかを確かめる、でしょ？」
「で、そのアンタが何でここにいるのよ？」
「決まっているじゃないか。報告するためさ」

シニカルな笑みを口元に浮かべ、久遠はしなやかな動作でポリバケツから飛び降りて近づいてくる

「マスター。繁華街を中心とした半径数百メートル付近に魔術師の気配は近づきませんでした」
「では、魔術の気配は？」
「先ほどその男が死ぬと同時に消えました」
「どういうこと？」
「恐らくは、その男を魔術的媒介に繋がっていたのかと」

一人と一匹がジャッカルと呼ばれていた男の死体を見る
視線の行き着く先は見開かれた、魔に染まった紅い瞳

「なるほど。そういう『瞳』か」
「ご存知で？」
「文献で見たわ。確か名は……【連枝眼】だったかしら」

多数の視線を持つ事でより状況を完全に近い形で把握する、という能力を持つこの『瞳』は、魔術によって後天的に得られる『瞳』の中では最もポピュラーな部類に入る
そんな事を記憶していた情報から整理しながら、やれやれと首を振り、氷雨は中天を過ぎた月を見上げた

「どうやら、これからが本番らしいわね」

その四

「運命とは、まこと数奇なものよな」

昏く澱んだ空気に包まれた工房の一室で、魔術師は一人ごちた
部屋の中央と天井には魔法陣が構築されているが、それが駆動している様子はない
それなりに広い一室なのだが、部屋にあるものと言えば古びた机と椅子、そして幾つかの書棚
殺風景とすら言える部屋模様は、まるで魔術師の心像を表しているようだ

「それにしても、ああも容易く倒されるとはな」

魔術師の視線は机の隅に置かれた写真立てに向かう
そこには3人の人物の姿が納められた写真があった
一人はかつての魔術師
その隣には傲岸不遜を体現したかのような男
そして魔術師ともう一人の男に挟まれる形で立つ、少女の姿
ふっ、と魔術師は昔を思い出すように遠い眼をしながら笑った

「お前の不肖の忘れ形見が、この私を殺しに来るか」

あの頃はまだ簡易的な魔術すらろくに扱えもしなかった少女が、自分を殺しに来る
実の父親に肩の烙印を押され、実の父親に犯され、実の父親を殺した少女が、自分を殺しに来る
これだから人生というものは捨てたものじゃない
魔術師は自分でも驚くほどの歓喜に打ち震えながら、少女の来訪を

待った

――――写真に写る少女の瞳は、金と銀
そして、写真の少女は――――

＊＊＊

月が照らしていた
蒼々とした光
無慈悲に、無意味に、無価値に、無感動に、照らしていた
白夜町と深夜町を繋ぐ広大な草原の一角に建つ廃屋を

「うーん。今回ばかりはまずったかな……」

久遠は周囲に満ちる澱んだ大気の魔力を感じていた
それは常人なら近寄るだけで気分が悪くなるほどに汚染されている
魔術師としての才能を持たずとも勘のいい人間なら恐らく物理的な
圧迫感と束縛感を感じられるだろう
ここに来て久遠は自分が踏み込んではならない領域に踏み込んだと、
ようやく気付いた
だが今更戻ろうにも敵の魔術師が起動させた結界のせいで、ある一
定以上は廃屋を離れられないようになっている

「結界だけ起動させておいて何もしてこない所を見ると、どうやら
相手は誘ってるみたいだね」

明らかな罠に自分から飛び込んでいくのは決して心地よいものでは
ない
しかし、久遠には大抵の事なら自分でなんとかできる自信も実力も

ある
それに相手の魔術師にも興味があった
「はあ。じゃ、行きますか」
言葉とは裏腹に、久遠の表情は自信に満ち溢れていた

ソレと対峙した時、久遠は己のミスを瞬時に悟った
「まいったね。まさか、アンタが相手とは夢にも思わなかったよ」
冷たい汗が全身を濡らす
「ほう。使い魔ごときが我が身を知るか」

眼前のボロボロのローブを纏った魔術師がゆっくりと椅子から立ち上がる
頭に被せてあるフードのため、容貌ははっきりとしないがその鋭い眼光だけが覗いている
何もしていないというのに全身から迸る魔力の波動が久遠を縛り付ける
「余程に教育が良いと見えるな。オマエの主人は」

バサリ、とローブを手で払いのける
長い白髪と琥珀色の瞳がローブの下から現れ、魔術師の容貌が明らかになった
強く押すだけで折れそうな華奢な体付きとは裏腹に、その顔は精気

に満ち溢れている
「――――クッ！　この威圧感、流石だね」
「ぬかせ。この身の魔力の波動を受けても動じぬオマエが吐く台詞ではないわ」
魔術師の言葉通り、久遠の顔には笑みが張り付いていた
それを指摘され、久遠は更に笑みを深めた
「これでも生前は魔術師でね。他人の魔力を感知すると武者震いが止まらないよ」
「なに？」
魔術師は己の耳を疑うように顔を顰めた
「生前だと？　オマエは一体何を――――」
言いかけて、ふと脳裏を掠めるものがあった
「問う。貴公の名は？」
「久遠、と今は名乗っている」
魔術師の眼が驚愕に見開かれた
「あの【久遠の夢幻】かっ！！　擬態魔術を極め、【イデア】に辿り着いた存在だと！？」
「以後、お見知り置きを、【磐石の棺】よ」
驚愕と畏怖に打ち震える老魔術師に、久遠は優雅な仕草で一礼を取って見せた

「何故そのような矮小な姿になっているかは与り知らぬが……」
自らの二つ名を呼ばれた事で自信を取り戻したのか、魔術師は軋むような声を絞り出して敵意をむき出しにする
少し喋り過ぎたかと久遠は悔やんだが、もうどうにもなるまいと思い直す

「その身が体現する魔術を奪う機会である事には変わりないか」
「返り討ちになるとは思わないのかい？」
「戯言を。今の貴公に何が出来る」
「そうだねぇ。例えば……君を打ち倒す事とかね！！」

言い終わると同時、抑えていた魔力を最大出力で開放して、そのまま魔術師にぶつける
純粋で強大な魔力の波動が魔術師を襲い、その身を吹き飛ばす

「ぬぐぅぅっ！　流石は音に聞こえし大魔術師よな。そのような矮小な身になってもこれほどの魔力を出せるとわ！！」

空中で空かさず体勢を整え魔術師は壁際に着地する
久遠の開放した魔力波は咄嗟に魔術師の展開した障壁をいとも簡単に突破していた
魔術師の華奢な体のあちこちに僅かな出血が見られる

「面白い！　我が魔術がどこまで貴公に通じるか試行してみようか。存分に相手をしてくれるわ！！」

腕を大きく薙ぎ払うワン・アクションで、予め待機させておいた無属性の魔弾を放つ

上下左右に複雑な軌道を描きつつ迫り来る魔弾を見据え、久遠は詠唱を開始する

「荒ぶる風よ、滴る炎よ。我は汝らに意志を与え、意義を与える」

冷静に一つ一つを見極めて回避する久遠を眼にして、魔術師は新たな魔弾を精製して放つ

しかし、そのどれもが不自然に久遠を逸れていく

「風は弓、炎は矢と化して我が敵を撃ち穿て！」

瞬間、今まで久遠の周囲を逸れていった魔弾が炎の属性を纏い、風の加護を受けて魔術師に飛ぶ

「なに！？」

驚愕する暇もあればこそ、魔術師は魔弾で迎撃しつつ、できなかったものは障壁で防ごうとする

が、幾本かが魔術師の体を掠りローブを伝って燃え始める

「おのれぇ！！」

久遠は魔術師が消火に手間取るうちに次なる魔術の展開を試みる

「祖は石。万物の基であり素たる———」

そこまで詠唱して、はたと久遠は気付いた

自らの呼び掛けに対して、世界が何にも変容していない事に

（“マナ”に意志が浸透しない！？）

魔術とは世界に満ちる“マナ”に、自らの意志を浸透させる事によって始めて形となる
魔術師と呼ばれる人間は、これが意識することなく行えて初めて魔術師たり得る

（この僕が魔術の起動に失敗した？　あり得ないよ、そんなこと！！　だいたい、さっきはちゃんと発動したじゃないか！？）

「穿て、影よ！！」

動揺する久遠の隙を、魔術師が黙って見過ごすはずもなく、消火もそこそこに最短詠唱で魔術を起動する
力強く指し示された影が隆起し、寸でのところで気付き跳び退った久遠のいた場所を一瞬送れて貫く
不恰好ながらも着地した久遠は、しかし即座に顔色を変えて更に跳躍する
その久遠を追うように、影が次々と先鋭化して槍となり追い詰める

「クッ、このぉ！！」

避けきれないと判断した久遠は叫び声を媒介に、簡易的な衝撃の魔術を起動するも、やはり魔術は発動しなかった
再び動揺する久遠に、今度はいつの間にか放たれていた魔弾が直撃する

「カハァッ！？」

吹き飛ばされ天地が逆転する視界で、魔術師が更に展開した影の魔術の発動を感じ取る

無理矢理手足を突っ張って床を蹴り、進路を変更する事でなんとか回避に成功し、痛みを無視しながら素早く体勢を整える

「ククッ！　ここは我が体内も同然だぞ。如何に貴公といえど我が身に敵うまいよ！！」

魔術師は高らかに吼える
苦々しい思いでそれを見ながら、久遠は薄々ながら自分の魔術が発動どころか起動すらしなかった理由に勘付きはじめた
恐らくだが、この場は“マナ”の流れが一方方向に限定されているのだ
それも、久遠にではなく魔術師に向かって
つまり優先度が魔術師に傾いているがために“マナ”は久遠の呼び掛けに応じなかったのだ
最初に久遠が魔術を発動できたのは、魔術師が発動した魔術式に介入して権限を奪ったからである
しかし、この魔術は何度も使用できるものではないし、第一にして対象の術式が解明できていなければ全くの無意味だ

「……厄介な魔術を使うね」
「我が名の由来を忘れたか？　これは当然の結果だよ」

あらゆる出来事を想定し、かつ対処できる手段で以って自らの領域内でしか戦わない魔術師
故に、【磐石の棺】

「ふむ。貴公には期待していたのだがな、この程度とは興醒めな」

先程とは違い、完全な全方位からの攻撃に久遠も回避に徹するしかなかった

上は魔弾が、下は影槍が
思考する暇もなく襲い来る攻撃に、次第に対処できなくなりつつあった

「ここまでだな。では、さらばだ偉大なる先達よ

言い放ち、魔術師は第三の魔術を発動した

その五

「よもやな。勝利を焦るばかりに彼の者の特性を忘れるとは……」

未だ粉塵漂う中、魔術師は落胆を隠せずにいた

ちらりと目の前に視線をやると先の爆発でできたと思われる巨大な穴が天井に開いている

黒猫の姿はどこにもない

恐らくは天井の穴から魔術師に悟られるぬように脱出したのだろう

「流石は【久遠の夢幻】と呼ばれた者か」

【久遠の夢幻】

かつて魔術師の間では廃れて久しい業、【擬態】という魔術を極めた者

他人の魔術へと介入し、自身の魔力を使わずして魔術を行使する異常なほどの才能

五大属性魔術の術者としても有能であったにもかかわらず誰もが価値無しと断じた魔術を完成し、【イデア】へと辿り着いた

そして誰もが成し得なかった、世界と【具現世界】の融合を果した

唯一無二の大魔術師

彼の者こそは世界に現存する【最小世界】そのもの

名残惜しげに溜息を吐くと、魔術師は――――【磐石の柩】と呼ばれる老人は部屋を出る

いずれにしろ彼の目的は達成できたのだ。それだけでも良しとしなければなるまい

「クックック。さて、可愛い使い魔を傷付けられたのだ。このままでは済ますまい」

＊＊＊

カタンッ、といういつもの音に氷雨は作業の手を止めた

手元の時計を見れば時刻は夜中の１２時を回り、とっくに日付は変わっている

少し、集中しすぎていたようだ

作業を開始したのが午後４時からだから、都合８時間以上は不休だったらしい

何かを忘れる為に作業に没頭すると、ついつい他を疎かにしてしまう

過ぎ去った時間を認識したからか空腹感と疲労感が一気に圧し掛か

ってきた

バキバキと体の骨を鳴らしながら二階の作業室から出て一階の居間へと移動する

「――――あれ？」

拍子抜けした声が思わず出た

一切の光を追い出した居間の中、氷雨は当然そこにいるべき相手が見つからない事に呆然とした

気配はするが、しかし姿が見えない

自分と久遠は主人と従者という契約の繋がりで結ばれている

仮にも魔術師である自分が闇の中とは言え従者である久遠を見付けられぬはずがない

妙な焦りを感じながら、氷雨は滅多に点けた事がない居間の明かりを点した

一瞬の光による眩み

氷雨の眼が段々と光に慣れていく

一つの無骨な造りのテーブルを囲むように並べられたソファー

黒い絨毯

白い壁
それらとコントラストを描くように点々と散らされた
赤
赤
赤
紅
朱
その赤の中心に、横たわる黒猫
血臭がしなかったのが不思議なくらい夥しいほどの血溜り
それを作り上げていたのは、他ならぬ氷雨にとって数少ない掛け替えのない存在だった
「久遠ッ！！」
叫び、恐慌に陥りかけた思考を強靭な精神力を以って圧し止め、倒れ伏した久遠に駆け寄る
だが駆け寄ってみたものの何をすべきかまったく思い付かない
近寄ってみて動かないのは黒猫が気絶しているだけと判るとホッとする

しかし手を差し伸べかけてオロオロとし、何かを探すように周囲をキョロキョロと見回す

かと思えば顔を歪めて泣き出しそうになりかけて、やっと何をすべきかを思い付く

「そ、そうだ！　きゅ、救急箱よ！」

慌てて立ち上がってそのまま硬直

「――――て、家にはそんなものないわよ！！」

一人で突っ込んでみたもののそれで事体が解決す訳もなく、さらなる混乱が押し寄せる

悪い癖だ、と脳裏で誰かが囁く声

いつもそうやって肝心なところでオマエは何も出来ない

――――い

そんな事だからアノ人にも捨てられたんだ

――――さい

捨てられて、汚されて、晒われて、罵倒され、殴打され、奪われ、陵辱されて――――

――――るさい

そしてオマエが殺したんだ！

「うるさい！！」

髪を掻き乱し、涙を溢し、喚き散らした

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい！！」

ダンッ！　と床を踏み鳴らしてようやく落ち着きを取り戻す

自分の荒い息が苛立ちを掻き立てるが、それよりも先にやらなければならない事がある

「クソッ！　私は魔術に関しては素人に毛が生えた程度。簡易的な攻性魔術や幻術ならまだしも、治療なんて以ての外よ！！」

もう一度床を踏み鳴らし、思考を巡らす

考えろ、考えろ、考えろ

三度己に言い聞かせ、己の内なる記録へと介入する

「――――！」

微かな物音がその集中を乱した

音を立てそうな勢いで――――実際、音が鳴った――――氷雨は振り向く

「ちょっと、静か……にして、くれ、な、いか、な」

振り向いた先、赤に塗れた黒猫が片方の目だけを半分だけ開いていた

「こ、れでも、今回は、マ、ジで、ヤバイ…から」

「そんなの見れば誰でも判るわよ！」

億劫そうに口を開く久遠に氷雨はヒステリックに怒鳴り返す

そんなある意味で自分よりもボロボロな氷雨の様子を見て、久遠は猫顔にアルカイックスマイルを浮かべる

「長い、こと君の、使、い、魔を……やっ、てるけど、そ、んな君、を、見るのは、初めて、だね」

どこか嘲るような含みを持つ言葉に、氷雨は硬直した

「無様、だね。ぼ、くは、そんな主人、を、持った、覚えは、ない……よ」

「……なんですって？」

「何度も、言わせないで、くれる？」

思考が一気に白熱化した

やばい、と思った瞬間、既に体は動いていた

「言ったわね、このクソ使い魔ァッ！」

ドゴスッ！　と鈍い音が響き、同時に久遠の首が仰け反る

「んがぁ！？」

「どうせ私は落ち毀れの魔術師よ！　治療用の魔術なんて一つも使えないわよ！！」

それの何が悪いか？

これでも自分は精一杯頑張ってきたんだ

血が滲み、血反吐を吐き、血に塗れ、血の匂いが体に染み付くまで努力したのだ

それでも、それでも、それでも

それでもだ！
望んだ力は得られなかった
「馬、鹿だ、なぁ、君は……。君ができ、なけれ、ば、他にできる、人を、頼ればい、いだろ」
「っ！？」
「そん、な、ことも、思いつ、かないな、んて……」
「……」
「なんて――――」
「――――愚かな」
そうだ
自分にできなければ、できる者に頼ればいいのだ
あの頃とは違う
自分には、頼れる、信頼できる者がいるではないか！
なぜ最初に思い付かなかった
この後に及んで自分は、未だ全てを自分が成さねばならないと思い込んでいたのか

無様

無様だ

「その生き汚い命、もう少し長らえてなさい」

しっかりと床を踏み締める

眼光鋭く、背筋を伸ばし、泰然とした表情で告げる

久遠はそれをろくに見もせずに頷いた

最初から心配などしていない

自分の撰んだ主は、この程度の事でどうこうなる存在ではない

だから、安心してこの命を預ける

「私が、きっとあなたを助けてあげる。だから――――」

眠りなさい

堕ちゆく意識の中、久遠は笑んだ

きっと、この眠りから醒めた頃には全てが終わっている筈だ

そう、信じて

その六

「峠は越えましたね。後は一日安静にしていればいいでしょう」

どことなく不機嫌な含みを持つ無愛想な少女の声が告げる

「そう。よかった……」

氷雨は安堵の溜息を吐いた

憔悴さえ浮かべる氷雨の顔を、先程まで黒猫を手当てしていた少女は戸惑ったような顔をして見る

「あの、黒金先輩？」

「……あ、ああ。なに？」

いつもとは明らかに勝手が違いすぎる氷雨に、少女はどうにも話し掛け辛そうだ

それも当たり前か、と自嘲に似た言葉が浮かぶ

それほどまでに、今の自分は平常の自分とはかけ離れているのだろう

「火急、という事で先程は聞きませんでしたが……」

ちら、と所々に包帯や血止め用のガーゼが張られ横たわる黒猫を見る

その眼には静かに暗い炎が渦巻いている

「この黒猫は物の怪の類でしたね」

「ちょっと違うけど……、まあ似たようなものね」

【万能変化】と【魔術】を駆使する使い魔

世界でも恐らくは最高にして最強の使い魔に対して、物の怪扱いは見当違いもいい所だろう

だが、この二人にとってそんな違いは些細な事らしい

「それを私に、よりにもよって『神姫』である私に手当てさせるなど、今後は止めていただきたい」

「ああ、うん。悪いとは思ったんだけどね。どうしてもアンタしか思いつかなかったのよ」

氷雨の歯切れ悪い答えに少女は眉を吊り上げる

ここまで感情を素直に見せるのは、きっと私の前だけなんだろうな

そんな事を思っていると、話を聞いていない事を長年の付き合いで見切られたのか、いよいよ怒り心頭になったようだ

美しい顔が般若も斯くやと言わんばかりに引き攣っていく

「聞いているのですか！？　そもそも黒金先輩は学生の頃から――――」

どうやら愚痴と説教はまだまだ続くようだ

現在時刻は午前2時57分

やはりこんな時間帯に電話でいきなり呼び出されれば、いつもは比較的大人しい彼女でも怒っているらしい

この分では少女が朝の日課を行う午前7時まで続けられるのだろう

氷雨は疲れたように溜息を吐いた

「そもそも、なぜこのような事になったのですか？」

少女――――『神姫　飛白』は不機嫌さを隠そうともせずに問うてきた

氷雨は内心、冷汗を掻きながらどう答えようかと迷う

「あー、と。ほら、最近この町で物騒な通り魔殺人が起こってるでしょ？」

「ええ。この町に住んでいる者なら誰もが聞き及んでいる事でしょう」

どうもこの子は苦手だ、と氷雨は思う

学生の時分、一つ下の後輩だったこの少女に何度も迷惑をかけた

それだけにどうしても頭が上がらない

「実はそれを追っかけてたら犯人と遭遇しちゃって……」

「まさか、それに？」

「や、ジャッカルだかジョンソンだかは始末したんだけど、その後ろにえらいのがいてさー」

「……」

「それが実は魔術師でね。偵察に使い魔のコレを行かせたら……」

「なるほど。事情は理解できました」

飛白は居住まいを正すと真剣な表情で氷雨を見て

「つまり、先輩の怠慢が原因ですか」

ずばり言い切った

「グッ！　はっきり言うわね。まあ、その通りなんだけど」

「まったく。町をウロウロしている魑魅網慮は私の管轄ですが、そういった魔術的なものは先輩の管轄のはずです」

「いやいや、これでなかなか魔術というものは面倒な世界でね。迂闊に手が出せなんだよ」

「それは退魔を司る我が『神姫』も一緒です。それに迂闊な手を打ったのは紛れもなく先輩でしょ？」

やっぱりこの子は苦手だ

心底、氷雨は思った

しかし、と冷静な部分の思考が疑問の声を上げる

曲りなりにも生前は魔術を極めた魔術師である久遠が、一介の魔術師などにこうも後れを取るものだろうか

自分で言っておいてなんだが、久遠は単独戦闘能力なら主人である自分よりも強いはずである

例え敵の懐である工房で闘ったとしても余裕で勝利できる

ならば、一体なぜこのように敗北したのか？

敵である魔術師が彼と同域の大魔術師であるか、それとも相性か

前者なら自分の勝ち目は限りなくゼロに等しい

後者であるのなら、そもそも彼は負けはしない

相性云々は確かに戦闘においては重要視されがちだが、言ってしまえばそれはただ苦手なだけだ

克服さえしてしまえばそれは弱点にはなりえない

それは嘗て、久遠が氷雨に対して言った言葉だ

「それで、魔術師としての『黒金　氷雨』はどう思っているのです

か？」

その言葉に普段の怠惰な雰囲気を一変させて、【魔術師】である『黒金　氷雨』として冷徹な言葉を紡ぐ

「正直、やっかいね。魔術師としての力なら私よりも上な久遠が負けたとなると、私では相手にもなりそもうないわ」

ただ、と繋げ

「【退魔】としての私なら、少なくとも勝ち目はあるわ」

「【退魔】としてなら、ですか？」

「ええ」

力強く頷き、両眼を指して不敵に笑う

「忘れた？　私の【瞳】は、あらゆるモノを超越しているのよ」

＊＊＊

魔術師は困っていた

折角、親友の娘が自分を殺しにくるというのに自分には彼女を迎えてやる用意がない

というより、迎える手段がないのだ

「ふむ。あの小娘の『瞳』は少々厄介だわな」
写真立てに映るオッド・アイの少女を見遣りながら魔術師は呟く
金と銀の瞳
自然では有り得ならざる神域と魔性の融合
世界で唯一人、二つの異なる【瞳】を有する魔術師
しかし、その魔術の才はそこらの平凡な魔術師にすら劣る
それが、魔術師の知る少女の全てだった
「よもやあのような使い魔を得るとはな。中々どうして……」
思い出されるのは、先日自分と互角以上に渡り合った翡翠の眼を持つ黒猫
かつては【久遠の夢幻】と呼ばれた大魔術師
羨ましいものだ、と魔術師は思う
魔術師にとって優れた者に師事する事は栄誉あることなのだ
その栄誉が一介の魔術師にすら劣る小娘に与えられるとは――――
「――――否。この【磐石の柩】たる私が、あのような小娘に嫉妬するなど有り得ん」

そうだ

何より優れているのはこの身、この存在たる自分自身だ

その証拠に彼の【久遠の夢幻】すら退けたではないか！

久しく感じる事のなかった高揚感を味わいながら、魔術師はしばし愉悦に浸った

「おやおや？　えらくご機嫌そうじゃないか【磐石の柩】」

瞬間、魔術師は雰囲気を一変させて部屋の隅にいつの間にか現れた影を睨みつけた

「そう睨むなよぉ。俺とあんたの仲だろう？」

「キサマ、ぬけぬけと何をしに来おったぁっ！！」

部屋中の空気が震え、爆発的な魔力波が吹き荒れる

それをまるで涼風のように受け流し、影は平然と笑った

「嫌だなぁ。それじゃあ、まるで俺が悪いみたいじゃないか」

「黙れ！　そもそもキサマが諸悪の根源であろう！！」

「おいおい、勘違いしてくれるなよ。俺はあんたの願いを叶えてやったにすぎないんだぜ？」

ギリリッ、と魔術師は奥歯を噛み締めた

その通りだった

そして、そう願ったのは他の誰でもない自分だった

影はしばらく魔術師の殺意を味わうように眺めた後、ゆっくりと光が届く範囲へと歩を進めた

「それによぉ、あんなに最高の獲物を見つけたんだ。最後までじっくりと味わいてぇのよ」

光に照らし出されたその姿は、二日前に氷雨によって討たれた殺人鬼【ジャッカル】であった

不思議な事に体には傷一つなく、精気が抜け落ちていた顔はいまや活き活きとしている

「クッ！　【不死人（アンデッド）】風勢が……」

「ハハハハハッ！　それはお互い様だぜ、魔術師さんよ？」

響き渡る狂笑に魔術師は苦々しい顔付きとなった

「ふん。息も絶え絶えで逃げ延びてきた分際でよく吼えるわ」

「所詮、死に抗うあんたら人間には解せぬ世界さ」

嘲る口調を正そうともせずに、しかし眼だけは怒りを湛えて睨みつける

「まあ精々、お互い仲良くあの女を待とうとしようぜ」

その七

ザワァッ

人気のない草原に、自然では有り得ならざる風が吹いた

「……ここね」

風が吹きぬけた後、最前までは誰いなかったそこに一人の女性が立っていた

黒い長髪とロングコート

金と銀の不揃(オッドアイ)いの瞳

黒金氷雨は、一部の隙もない姿でそこに立っていた

彼女の視線の先には、今にも崩れ落ちそうな廃屋

「ふん。結界も発動させないなんて、よほど私を舐めてかかってるようね」

呟き、一歩を踏み込んだ瞬間――――――

ドクンッ！

心像の鼓動のような音ともに、廃屋を中心とする半径数百メートルの空間が隔絶された

そして限られた空間内を澱んだ魔力が満たす

同時にその澱んだ魔力よりも一層、不快で汚染された魔力が一点に集中していく

氷雨は険しい顔して魔力の集中する場所を睨む

竜巻状に収束していた魔力がある一点で膨脹をし始めた

やがて収まってきた魔力の渦から顕れたモノを見て、氷雨の表情が驚愕に強張った

「よう、お嬢さん。その節はどうも」

「……馬鹿な」

ニヤリ、と氷雨に陰険な笑いで声をかけたのは、紛れもなく一昨日の夜に殺したはずの男――――ジャッカルだった

あれほど傷付けられた肉体には傷痕一つ見受けられず、着ている物さえ違っていなかったなら、まさに一昨日の夜そのままの姿だったであろう

驚愕と緊張に強張る氷雨を余所に、ジャッカルは舌なめずりしながら身構えた

それを見て氷雨も取り敢えず疑問を思考の隅に追いやり、戦闘態勢をとる

初めて会った時とは逆の心情で相対する二人

先に動いたのはやはりジャッカルだった

グッと身を屈めると、次の瞬間には弾丸のような勢いで氷雨へと迫り――――

「なにっ！？」

すぐ傍らを通り過ぎ、一瞬で氷雨の死角へと移動した

予想外の事にやや焦りながらも氷雨はその場から跳び退りながら振り向く

だが振り向いた先にはジャッカルの姿はなく、冷たく凍えるような殺気が背筋を這い上がった

「死ネェェェェェェェェェッ！！」

氷雨と同じ方向に跳び、巧みに死角に張り付いていたジャッカルが袈裟に肉厚のナイフを振り下ろす

「っあああああああああ――――――！？」

常人ならそのまま斬り裂かれるであろうその攻撃を、しかし氷雨はナイフが身に喰い込んだ瞬間に無理矢理に前方へと跳躍する事で致命傷を避けた

しかもただ前方に跳んだのではなく、着地と同時にバネ仕掛けのように後ろ向きで舞い戻る

「ウオオッ！？」

流石にこれはジャッカルにとっても予想外だったのか、フォロースルーの最中にバランスを崩す

しかし、氷雨の行動はそれだけでは終わらない

後ろ向きのまま体当たりをかますと、バランスを崩したジャッカルの顎を肘で跳ね上げる

同時に腰の捻りと体当たりの勢いを利用した正拳突きが放たれ、見事に鳩尾に突き刺さった

「グウゥゥゥッ！！」

跳ね上がっていたジャッカルの頭部が腹部に受けた衝撃により振り子のように戻ってくる

そのまま顔面突きを仕掛けるつもりでジャッカルは歯を食いしばったが、氷雨は素早く後ろに退いて逃れる

「闇より出でし縋りつく絶望の手よ。悲哀と憎悪に塗れた虚無の因子よ。我は柩を織りて涙を流す者」

左手で虚空に複雑な印を描きつつ、氷雨は詠唱する

自らの扱える数少ない攻性魔術のなかで、最も威力の高い魔術の一つの構成を練る

「させると思うか！？」

【不死人】ならではの痛みを感じないという持ち味を生かして、ジャッカルが魔術の発動を阻止すべく動く

ナイフを投擲した所で一度目と二度目の戦闘の焼き増しになるだけだと判断したジャッカルは、素早く間合いを詰めて斬撃を繰り出す

「凡百の悲劇に嘆き悲しむ愚者達に、我が昏き底たる鳴動を知らしめん」

詠唱を続けつつ、なんとか顔面を狙った刺突を首を捻って避けるが構成された魔術を発動させる事ができなかった

避けそこねた髪の一房が宙を舞い、その向こうから間を置かず二度目の刺突が襲う

「――――ッ」

反応しきれず額を大きく斬られ、サングラスと髪と血が散った

そして意図的に隠していた不揃いの瞳が飛び散るそれら越しに見たものは、固いブーツの靴底だった

「カハッ！！」

顔面を強打された氷雨の頭部が、先程のジャッカルと同じく後へと

跳ね上がり

「オオオオオオッ！！」

ナイフを持たない手によって繰り出された貫手が氷雨の身体を貫いた———

「なに！？」

かのように見えたが、ジャッカルは疑惑と驚愕の声を上げつつ跳び退った

そのまま警戒するように距離を取ったジャッカルは己の腕をマジマジと見つめ、次いで仰向けに倒れた氷雨を見る

ダメージが大きかったのか氷雨はふらつきながら立ち上がり、忌々しげに舌打ちした

「まったく。女の顔に傷をつけられたばかりか、足蹴にまでされるとはね。おかげで構成していた魔術も霧散（キャンセル）されたよ」

額から流れ落ちる血を手で掬い取って舐めながら、もう一方の手で顔を覆う

血に濡れた半面と手で隠された半面

俯き加減の顔は影に隠れてよくは見えないが、僅かに覗く不揃いの双眸が怪しく闇に光っている

「……女。貴様は何者だ？」

「ふふふ。この期に及んで、どうしてそんな意味のないことを問うんだい？」

質問に質問で返しながら、氷雨はゆっくりと態勢を立て直す

「確かに俺の手は貴様を貫く筈だった」

「ならば、どうして私は無傷なんだい？」

「戯言を。貴様、どのような手品を使った？」

答える代わりに氷雨はロングコートを指し示して不敵に笑った

「やはりあなたは魔術の恩恵を受けているだけであって、魔術師ではないようね」

ジャッカルが鋭い視線で氷雨を睨みつける

その身体は次の激突に備えてギリギリと引き絞られていた

「オオオォッ！」

咆哮と共にジャッカルが夜闇に溶け込むように凄まじい速度で駆け出した

人外の力任せな踏み込みと袈裟斬りに反応できたのは、偏に氷雨の反応速度が常人を遥かに上回っていたからである

普通の人間なら、反応する間もなく二つに裂かれていただろう

一際大きな不協和音が響く

「クッ」

ロングコートの袖の下に仕込んでいた手甲で受け流したものの、重く鋭い斬撃に態勢を崩される

これほどの攻撃はそう何度も受けられるものではない

火花を散らして遠ざかるナイフの光刃を見つめながら、氷雨は冷静に状況を把握していた

翻って引き戻されるナイフの柄を左手で殴りつけるように弾き、右の手刀を振り下ろす

「せあっ」

振り下ろす軌道を無理矢理変更し、ジャッカルの迎撃を掻い潜るように喉に向って貫き手を放つ

しかし必殺の貫き手は難なく払われ、正面に隙が出来た瞬間に前蹴りで胸を強打される

追撃に振われたナイフが咄嗟に構えた左手を撫で斬り、次いで氷雨が放った起死回生の回し蹴りがジャッカルの首を強襲

錐揉みしながら吹き飛ぶジャッカルから素早く距離を取り、短縮された魔術を放った

「纏い、刻みつける、一陣の風、我が手に宿り知らしめろ！」
指向性を持って圧縮された真空の断層が予め定められた経路（パス）を通してジャッカルへと疾る
「グオォォォッ！？」
痛みではなく衝撃に息を詰まらせ、ジャッカルは全身をカマイタチによって切り裂かれながら更に吹き飛んでいく
それに追随するように氷雨は駆け出す
急速に転換していく視点の中でそれを確認したジャッカルは、空中で身を捩り強引に態勢を整える
そしてジャッカルが地へと足を着けた瞬間、氷雨は既に間合いの内にジャッカルを捕えていた
一歩目を何より速く
二歩目を何より鋭く
三歩目を何より強く
理想的な踏み込みによって体内で循環し、蓄積された力に更に魔力を上乗せする
驚愕の表情で氷雨を見るジャッカル
接した腕を通して、純粋な破壊の為だけのエネルギーをジャッカル

に流す氷雨

全ての工程を終えた後の一瞬の停滞

ゴォウンッ！！

爆音にも似た音が響き、咄嗟に跳び退って逃れようとしたジャッカルの右半身が吹き飛んだ

声もなく衝撃の勢いに圧されて倒れるジャッカル

もはや常人の目から見ても戦闘行為は不可能と断ずる事ができる状態に追い込みながらも、しかし氷雨は戦闘態勢を解かずにいる

なにせ相手は痛みを感じぬ生きた死体――――不死人（アンデッド）だ

右半身を吹き飛ばした程度で大人しく動かぬ屍に戻ってくれるような、可愛い存在ではない

「クックック」

やがて、暗い笑いが夜に響いた

「クックック……。ハーッハッハッハッハッ！！」

盛大な笑い声を上げながらジャッカルは何事もなかったように危な

げなく片手で立ち上がった

ニヤニヤと嘲りに笑うその顔は、まるで氷雨の行動が間違いだと言いだ気な様子だ

氷雨は内心で訝しがりながらも決してそれを表に出さぬように、油断なく様子を窺う

「お前は最大のチャンスを逃した」

ジャッカルは静かに言い放った

しばし氷雨の反応を窺うように言葉を切ったが、何の反応も引き出せないとわかるとあっさりと興味を失った

「もう一度繰り返すぜ。お前は最大のチャンスを逃した」

言い終わると同時、ジャッカルの身体が燐光に包まれる

だが氷雨の眼はその燐光越しにジャッカルの身体に起きている異変を見抜いていた

失われた筈の右半身が傷口を中心にうねり、蒸気を発している

見つめる氷雨の目の前で、ジャッカルの身体は再生しようとしていたのだ

「――――チィッ」

慌てて飛び出すも氷雨自身、間に合わぬ事を悟っているのかその表

情には焦燥が浮かんでいる

「再生するというのなら――――」

【仙連歩】と呼ばれる特殊なリズムの呼吸法によって完成する理想的で効率的な踏み込みを以って距離を詰め

「――――今度は完膚なきまでに吹き飛ばしてやる！！」

中国拳法における発勁に似た性質を持つ、氷雨が習得した独自の攻撃法を繰り出す

「悪いがそう何度も当たってやるほど、御人好しじゃないぜ？」

確かに氷雨の攻撃は鋭く、疾い

しかし致命的なまでに狙いが直線的であり、タイミングが読まれ易いのだ

おそらくはジャッカルでなくとも武道に２０年以上の歳月を経てきた者なら、避けられないまでも充分に対処できる

それを証明するようにジャッカルは伸びてきた氷雨の腕を上へと弾き、軌道をずらした

氷雨の放つ技は強力かつ防御不可能だが、それは蓄積された力が相手へと伝わる瞬間に触れていなければ伝わる事はない

つまりその力が伝わる前に攻撃そのものを途中で止める、あるいはタイミングさえずらしてしまえばそれだけで不発となる

そして――――

「今のテメェは無防備だぜ！？」

攻撃が強力であればあるほど、その後の隙は大きくなる

腕を大きく頭上に弾かれた事で隙が出来てしまった氷雨は、瞬間、無防備な姿を晒した

「ハハハハハッ！　俺の、勝ちだぁぁぁぁぁっ――――！！」

勝利を確信したジャッカルは高らかに吼えた

が、先程と同じく必殺の刺突はなぜか空を切る虚しい感覚を残したまま伸びきり、

「さっきの台詞をそっくりそのままお返しするわ」

弾かれた腕の反動を利用して半身を開き、伸びきったジャッカルの腕と交差するように逆手を伸ばす

「今のアンタは無防備よ」

ジャッカルが何らかの反応を起こすより前に、蓄積された破壊のエネルギーを解放する

――――ドッゴオォォォォォォォンッ！！

最初よりも倍に勢いする轟音が響く
粉塵が巻き上げられ、氷雨の手に確かな手応えを残してジャッカルの身体が砂煙の向こうに消える
決まった、と氷雨は確信した
いかに【不死人】といえども生命の核たる頭部と心臓を同時に失えば、生命の維持はおろか再生もできない
事実、砂煙が収まった視界の先では、上半身を失い下半身のみとなったジャッカルの身体がピクリとも動かずに倒れている
それを見てようやく氷雨も警戒を解き、盛大に息を吐き出した
「まったく。まさかいきなり切り札を使ってしまうなんて」
これでこの先の戦闘で使用する筈だった戦略の幅が縮まってしまった
氷雨は苦々しそうに黒いロングコートを見る
切り札――――氷雨の着ている黒いロングコートは普通の物とはまったく違う概念から成り立っている
正式名称は魔術的概念兵装【真夏夜の夢】
幾つかの条件が重なった時のみ、使用者の魔力と引き替えに位相を

ずらすという効果を持つ
当然、位相のずれた空間に存在する者には普通の手段では触れる事は不可能である
持続効果は消費する魔力に反して3秒と短い
たいした魔力を持たない氷雨では一日に使用できる回数は最大でわずか五回
しかもこれは、他に魔術を使用しないで発動できる回数なので、実質的に発動できる回数は二回が精々である
「まずいかな。ここは一旦撤退した方がいいかもしれないわね」
予想外の敵との遭遇により多くの魔力を使用してしまった今、敵である魔術師と戦うのは不利
そう判断した氷雨は、念のために用意しておいた撤退するための手段を講じようとして、気づいた
「なに、この異様な魔力の高まりは？」
咄嗟に魔力の出所を探そうとして、その必要がない事を悟る
なぜなら、その隠そうともしない異様な魔力の高まりはさきほど自分が手を下した筈の【不死人】の残骸を中心に起こっているのだ
まさか、と信じられない面持ちで氷雨が見守る中、確かに上半身の全てが吹き飛んだ筈のジャッカルの身体が見る見るうちに再生して

いく

これほどの再生力は、生粋の“魔”の中でも最高の復元能力を持つ【悪魔】に匹敵する

確かに【不死人】は“魔”に属するが、基本的には“肉体”のみが反転した状態のため、生粋の“魔”にはなりきれない

多少の再生能力は得られるだろうが、分子レベルでの“肉体”の【復元】は不可能なのだ

「まさか、在り得ない。こんなこと……」

「在り得るんだな～、これが」

ものの数十秒で再生した傷一つない身体に満足そうに頷きながら、ジャッカルは立ち上がった

「馬鹿な。細胞レベルでの再生ならまだしも、分子レベルでの復元なんて……」

「だから言ったろ。テメェは最大のチャンスを逃したってな」

これ見よがしにジャッカルは大きくてを広げて肩を竦めて言い放った

それは絶対的な優位に立ったと確信した者に共通する、慢心の瞬間だった

疑問を一先ず放置して、即座に間合いを詰めた氷雨は必殺の魔手を繰り出す

「ハァッ！！」

否、慢心をしていたのは氷雨の方であった

油断していたと見せかけていたジャッカルは、あっさりと氷雨の攻撃を回避すると反撃に移った

氷雨の腕が伸びきった瞬間を逃さずに捕え、肘を固定して外側に捻るようにして一本背負いで投げ飛ばす

関節が悲鳴を上げる中、しかし氷雨は驚異的な体バランスで投げを切り返して間合いを開ける

「まあ、そう急くなよ。ゆっくりと解説してやるからよ」

ニタニタと笑うジャッカルの顔を忌々しげに見つめるしか出来ない氷雨

それがわかっているからこその余裕と自信が、ジャッカルの口を軽くした

どうやら氷雨に出し抜かれたのが相当悔しかったらしく、何か言い返さずにはいられなかったのだろう

「お前は俺を魔術師ではない、と言ったが、そいつは大きな間違いだ。確かに俺は魔術師ではない、正確には魔術使いだ。だが、ちゃんと魔術の仕組みも理解しているし、知識と技術も伝承している」

見せつけるように掲げられたジャッカルの右腕には、一匹の蛇が自

らの尾を咥えて輪となっている刺青が彫られていた
そしてその刺青の意味する所を、氷雨は知っていた
「まさか……その刺青は、【天環】の……」
「その通りだ。今は朽ちた魔術師の家系の掲げた紋だ」
【天環】
それはかつて日本の魔術を伝える一族に在って、異端と呼ばれた家系の一つ
その目指したモノは唯一つ
“魂”の再生である
肉体において、失った器官を【再生】する手段は、時間と手間はかかるものの数多くの手段が存在する
しかし先に述べた通り、分子レベルでの“肉体”の【復元】は人間には不可能であり、尚且つ損失した“魂”を再生させるなどいう手段は考えるだけ無駄だと思われていた
だが、その無駄に真っ向から挑んだのが【天環】の一族であった
そして彼らは、絶対的に不可能であるとされた分子レベルでの“肉体”を【復元】させる手段を構築し、損失した“魂”を再生させる手段を編み出したのだ

「もっとも編み出したはいいが、やはりそれは人間には不可能な、というよりも生きた人間には耐え切れないものだった」

だから、とジャッカルは続ける

「その技を刻み込んだ人間の“肉体”を反転させ、膨大な量の魔力を扱う事ができれば、一族の悲願は達成されるという結論に至ったのさ」

「つまり、その最初で最後の実験体が、アンタという訳ね」

「正解だ」

なるほど、ならばあの法則を外れた復元能力も頷けるというもの

「という事は、アナタの後ろに控えている魔術師は、【天環】の一族という事か」

「そいつは早計と言うものだ。なにせ【天環】の一族は、数年前に断絶している。唯一人、俺を除いてな」

「……じゃあ、アナタの後ろにいるのは一体誰？」

「クックック。話してやってもいいんだが、直接会って見た方が驚きも倍増するだろ。自分で確かめな」

「そうね。じゃ、アナタをさっさと始末して会いに行くわ」

「果たしてお前にできるのか？」

両者は申し合わせたように構え、地を蹴る

「やってみせる！！」

「やってみせな！！」

音速に限りなく近い速度で激突する両者

ジャッカルは両手に隠し持っていたナイフを握ると、まるで弓を引くような態勢を取った

ナイフの刀身には複雑な紋様が刻まれている事から、それが何らかの強化概念を付随されているのは明らかだ

突き出された左のナイフは斬撃、引き絞られた右のナイフには貫徹の意が強調されている

それに対して氷雨

深く腰を落としてやや後に体重を傾け、体の捻りと腕の引きを最大限まで発揮して、純粋な破壊エネルギーを体内で練るための歩法と、縮地の特性を兼ねた高速移動のための歩法の同時使用

引き絞られた右拳には上位攻性魔術に匹敵するほどの魔力が篭められている

「――――オオオッ！」

「――――ッ！！」

ズドンッ、という最後の踏み込みを終えると同時、両者は持てる最大の技をぶつけ合った

――――斬刑　二刀一袈

――――奥義　黒き風

ジャッカルのナイフは確かな手応えと共に氷雨の身体を袈裟に斬り裂き

氷雨の拳は何の抵抗もなくジャッカルの胸に突き刺さり、魔術的概念によりジャッカルの身体を粉微塵に吹き飛ばした

刹那の差で氷雨の技はジャッカルより先に決まったため、ジャッカルの技は殆ど不発に終わった

だが、それでも勢いは殺しきれず、ジャッカルは粉微塵にされながらも最後の瞬間まで氷雨の身体を斬り裂いた

粉微塵に吹き飛んだジャッカルの破片が飛び散る中、氷雨は両膝を折って倒れ込んだ

動けなくなるような致命傷ではない、しかし無視できるような深さの傷でもない

放っておけば自分は一時間もしないうちに出血多量で死に絶える

このままでは久遠の二の舞になる、と判断した氷雨はよろよろと頼りない動作で立ち上がると結界の境目まで後退した

そこまで後退しておいて、後ろも振り返らずに氷雨は懐から一枚の御札を取り出しながら口を開いた

「この借りは、後日改めて返しに来るわ」

「ふむ。では期待して待っておこう」

返答は即座に帰ってきた

振り返らない氷雨の視界には映らないが、氷雨の背後、一軒の廃屋の扉の前にいつのまにか人影があった

「あの偉大なる先達にも、歓迎すると伝えて置いてくれたまえ」

「必ず」

伝える、と言い終わる前に結界が澄んだ音と共に砕け散り、その音が氷雨の声を掻き消した

その八

そして、草原には一人の魔術師と、やっと再生を終えた不死人しかいなくなった

「てめぇ、どういうつもりだ？　なぜ何もせずに逃がしやがった」

「貴様には関係なかろう」

「うるせぇ！！　今俺は最高に気が昂ぶってるんだ！　事と次第によっちゃあ、例えテメェでも殺してやる！！」

猛るジャッカルを、魔術師は冷めた眼で一瞥する

まるで路傍の石でも見るような目付きが、ジャッカルの神経を逆撫でした

積もりに積もった憎悪と敵愾心が牙を剥いた瞬間だった

一瞬で抜いたナイフを魔術師の心臓と額へ投擲し、自らも弾丸の如き勢いで飛び出す

常人では何が起こったのかわからないまま死ぬ瞬間だったはずである

しかし、何もわからずに地に這いつくばったのは、襲い掛かった方のジャッカルであった

「グ……ォオッ！　て、テメェ、なに、しやが……った！？」

侮蔑に満ちた表情で自分を見下ろす魔術師に怒りを覚えながらも、ジャッカルは自らの身に起きた事体を把握しきれずにいた

あともう少しで投じたナイフが魔術師の体に突き刺さろうという瞬間、ナイフは魔術師の展開した障壁に弾かれた

そこまでは見えていた

だが、その後の自分の突撃が如何にして防がれたのか、全くもって見当がつかない

「愚か者が。誰が貴様を【不死人】にしてやったのか、忘れたのか」

その言葉に秘められた意味こそが、ジャッカルが決して魔術師に及ぶ事の出来ない最大の理由だった

「貴様を【不死人】にする際に、貴様の体を色々と弄らせて貰った。これに見覚えはないか？」

「そ、それは……！？」

絶句したジャッカルの視線の先、差し出された魔術師の掌の上に乗せられていた物は蒼い宝玉だった

特に何の装飾も施されていないが、なぜか見る者を惹きつけて止まないナニカを感じさせる

ただしそれは、狡猾な悪魔の誘いにも似ている

「これを貴様の脳と主要な部位に埋め込んで同化させた」

その蒼い宝玉は、ジャッカルにとって見覚えのあるものだった

魔術使い、とジャッカルは氷雨に自称したが、実はそれも真実ではない

簡潔に言うならば、ジャッカルは魔術の恩恵を受けている、魔術師としての素養を持つ人間なのだ

【天環】の一族は早くから衰退し、もはや一族に魔術師を名乗れるほどの魔力を持つ人間はいなくなった

それも当然か

彼らは魔術による修練、魔術の相続を、全くと言っていい程に行わなかった

【天環】という一族は、集団でありながらも個という自意識に優れた異様な一族であった

自らこそが真実の一たらん、と他を蹴落とし、引き摺り、淘汰するうちに衰退の道を辿ったという情けない実情を持つ

故に、彼らは自ら行き詰まりを感じたとき、初めて後への相続を考えるのだ

しかしその頃には、もはや手遅れになっている事が常であった

その例に洩れず、ジャッカルは【天環】の一族最後の子として生まれたが、期待されていた程の内在魔力は有していなかった

仕方なく【天環】の一族はジャッカルに一族の悲願たる【流転】という技を、彼の霊体に刻み込むことで相続を行う事にした

そのため、ジャッカルの内在魔力はその技の設計図を記録・保存するために大量に用いられ、他に裂く余裕などないに等しかった

ならば、なぜジャッカルが大量の魔力を消費する【流転】を使用できたのか？

その謎の答えが、魔術師の掌の上にある蒼い宝玉だった

名を、【ディープブルー】

大気中に漂う微量の魔力を吸収・貯蔵する性質を持つ、【秘蹟】と呼ばれる貴重な魔術的価値を持つ物体である

内在する魔力量が氷雨よりも多いとはいえ、その殆どが消費しつづけられるジャッカルにとって、【ディープブルー】は【流転】を使用するためには必要不可欠な物であった

これを常時、服用する事によってジャッカルは人間では到底、貯蔵・使用できない魔力を持つに至ったのだ

「これに少し細工をした。私の魔力に対してのみ強制力を発揮する。もはや貴様は私の人形も同然だ」

「クソッタレが。テメェ、初めからそのつもりで……！」

どんなに足掻こうと、ジャッカルの手足は痙攣するように震えるだ

けで一向に動こうとしない

「しかし、思ったよりも損傷が激しいようだな。貴様の内包する魔力では、おそらく後七度が限界だ」

しかも、と魔術師は続ける

「無理に魂を再生し続けた代償だな。それ以上はどれほど魔力を内在させようが、復元は不可能だ」

「――――な、に！？」

＊＊＊

「二日も連続でこんな夜更けに何を――――って、その怪我は一体！？」

零時を過ぎた時間帯にまたもや電話で呼び出された飛白は、居間のソファに力なく横たわる氷雨を見た瞬間、絶句した

黒い装束のせいで気づき難いが、かなりの量の出血があるようだ

よく見れば顔色も悪く、典型的な貧血時のそれである

「悪いわね。見ての通りの状況なの」

そんな状態にありながら、常の如く氷雨は振舞って見せたが、それが逆にどれほど危険な状態にあるのか飛白は理解した

巫女服の懐から取り出した小振りの瓶の中身を、躊躇なく患部にかける

「っぁ、ぐぅぅ――――」

「我慢してください。本来なら病院で手術しなければならないのですよ」

「それは、嫌だな……」

患部の洗浄と治癒の同時進行に顔を引き攣らせながら、それでも氷雨は戯言を呟く

瓶の中身――――神的概念によって精錬された特殊な液体が浸透したのを見計らい、飛白は精神を集中させる

「祖たる天の神より産まれし八百萬の霊霊よ」

術式詠唱を奉げ発現させる奇跡の細部を思い描いていく

緻密に、精密に

それは砂漠を構成する砂粒の一つ一つを数えるに等しい行為

より完璧にイメージする事によって、ただの人でありながら神の御技をも再現するに至る

「尊き命司りし火の垣となり我が四周を囲い、その中にて栄光とならん」

天頂より零れ落ちる雫を受け取るように掲げられた飛白の両手に、今、奇跡が宿る

飛白は輝く両手を氷雨の患部に押し当てる

すると、輝きに照らされた部分を中心に、ゆっくりとではあるが徐々に患部の組織が再生を始めた

この速度ならば、おそらく一時間もあれば完全に治癒するだろう

だが――――

「ハァ、ハァ、ハァ――――」

飛白の額には夥しいまでの脂汗が浮かんでいた

先にも述べたとおり、人は肉体において失った部分を再生する手段は、時間と手間はかかるものの、意外と多く存在する

しかし、それにはやはり代償が伴う

詳しい事を要約してさらに簡単に纏めると

この場合、飛白は魔術師風に言うならば魔力と呼ばれる、人が人として在る為の根本的なものを代償としている

だが労力の大きさと傷の治癒の進行速度はまったく違う

魔術やその他の非常識な手段で以って行う治療とは、実のところ大

変効率が悪い
それは燃費の悪さに加え、治療される側の新陳代謝の善し悪しに左右されるからだ
希有な治癒に特化した異能力や魔術を扱う者にとってはそれは問題にならないが、そうでない者にとっては重要な問題足りえるのだ
「ありがと、飛白。ここまでで充分だわ」
「でも――――」
「二日も連続じゃ、貴女が倒れるわよ。呼んじゃった私も悪いけど、最低限の傷の治癒さえ出来ればそれで充分よ」
縋り付いて来る飛白の手を優しく振り解くと、氷雨はろくに力が入る筈のない身体をソファから起き上がらせた
「あ……――――」
途端にバランスを崩して倒れかけた氷雨を、飛白は咄嗟に支える
そしてその体温の低さに驚く
「これは……！　まさか先輩、アレを使ったんですか！？」
それはもはや悲鳴に近い声だった
彼女にはそれだけで氷雨がどのような闘いをしてきたのかが理解できたのだ

だからこそ、彼女はある程度の確信を持って問うた

「それで、結果はどうでしたか？」

「……残念ながら」

だがその確信は、悔しげに首を振る氷雨によって脆くも崩れ去った

「そんな……！」

およそ世界に伝わるどの格闘技よりも殺人・破壊に特化した技能

習得すればまず間違いなく白兵戦においては無敵を自負できるほどの技能を習得した者が、文字通り己の命と引き替えに放つ奥義を以ってしても、打倒できなかったと言っているのだ

それを聞かされた飛白の心情は察するに余りない

半ば呆然としたまま、飛白はぐったりとして拙い動きしかできない氷雨を二階の寝室へと支えて行く

寝室に入るなりベッドに横になろうとする氷雨を止めた飛白は、素早く氷雨が着ていたロングコートとその下の物騒な武装類を外す

篭手、投げナイフ、短刀、ｅｔｃ……

一体どこにどうやって隠してあったのかと訊きたくなるほど溢れ出てくる武装類の数々

流石に飛白も呆れ顔になってくる

「こんなに準備万端だったのに、どうして失敗したのですか？」

下着姿のまま力なくベッドに沈み込もうとしている氷雨を今度は止めようとせずに問う

横になって落ち着いたのか氷雨はその言葉に苦笑しながら答える

「いや、使う暇がなかったのよ。それと、予想外の敵と戦闘になってね」

「結局【瞳】も使用せずに、純粋に肉弾戦を挑んだ挙句の結果ですか……」

疲れたように溜息を吐く飛白を横目に見ながら、氷雨は思う

彼女は、知らないのだ

退魔士という職業を生業とする一族の者だけに、一般人よりは事情に詳しいだろが、それだけでは不十分なのだ

魔術というモノを、外道の業を理解するには、それだけでは充分とは言えない

魔術師と退魔士

互いに相容れぬ者同士であり、決して交わる事のない者

その両端に身を置く氷雨だからこそ理解できる

魔術師と退魔士では、見えている視点が違うのだと

「悪いけど、私はこのまま寝る事にするわ。よかったら、貴女も客室を使って泊まって行ってもいいわよ」

「……そうした方がよさそうですね。先輩の怪我も心配ですから」

最後まで心配そうな顔をしながら飛白は部屋を出て行った

彼女は、退魔士としては優しすぎる

決してそれが弱さ、甘さに繋がる訳ではないが、それでも彼女は優しすぎた

あの若さで一流と言っても過言ではないほどの技量と経験を積み重ねているのは、流石に次期当主と言われるだけある

しかし、彼女は近しい者が傷つくのを酷く恐れている

彼女の強さの理由、強くあろうとする欲求の根源

それは黒金氷雨が遠い昔に捨て去った『慈愛』という名の殺害意志

「正義か愛という名の下に殺戮を是とする権限、か。下らないわ」

「けれど、それが魔に対する人がせめて持つ優位性。一概に否定するのは良くないと思うよ」

呟いた独り言によもや答えが返ってくるとは思わなかったのか、氷

雨はやや驚きながら枕元の照灯台を見上げる
そこには一匹の黒猫が座っていた
「久遠、あんた動いて大丈夫なの？　頭の中の妖精さんは何も言ってこない？　自分が誰だか理解できてる？」
「うん。もう動いても平気だよ。妖精さんは何も言ってこないなぁ。僕が誰かって？　僕以外の何者でもないよ。……て、あれ？」
ふと会話に違和感を覚えたのか、訝しげに久遠は氷雨と自分の言葉を反芻する
「……ねぇ、さっきさり気無く関係ないものが混じってなかった？」
「気のせいよ。あんたも起き抜けで頭が働いてないんじゃないの」
「そうかな？」
「そうよ」
なんだか納得がいかない、と呟く久遠の呟きに完全無視を決め込んで、氷雨は自らが体験した事を簡単に説明した
「魂の再生、か。正直な話、君の言葉じゃなければ一笑に伏す所だね」
シニカルな笑みを口の端に浮かべ、久遠は話し疲れて眠たげな己の主人を見る

真っ当な魔術師であるならば、それこそ久遠の言葉通り一笑に伏すだろう

それが当然だ

だが、でなければどうして己の主人がここまで消耗してなお仕留めきれていないのか？

魔術師としての氷雨は、使い魔である自分が目を覆いたくなるほどの無能者だが、退魔士としてならそれこそ世界でも有数の実力者だ

例え【瞳】や武器がなくとも、こと素手による肉弾戦において氷雨を上回れる者など、久遠が知る限りたった一人だけ

「確かに、私も油断していたわ。まさか近接戦闘で後れをとるなんてね」

「その自覚があれば充分だね。それで、次はいつ仕掛けるの？」

「明後日よ。それまでには体調を万全にするから、あんたも覚悟しときなさい」

「了解。やっぱりリベンジは早い方がいいよね」

その八（後書き）

すんません。ＰＣの調子が悪くて長らく投稿できませんでした。
よもやそんなに多くはないかもしれませんが、待っていてくださった方々、本当にすいませんでした。
次回は・・・・・・いつになるんだろう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6691c/

Ｎｉｇｈｔｉｎｇａｌｅ －Ｎｉｇｈｔｆａｌｌ－

2010年12月12日14時33分発行